

はしがき

序 章 構造災としての福島原発事故

構造災は、筆者が『知の失敗と社会—科学技術はなぜ社会にとって問題か』（岩波書店）で 2002 年に提示した概念 3p

構造災とは、科学と技術と社会のあいだの界面で起こる災害をさす 3p

第 1 章 構造災とは何か — 科学社会学の視点から

- 1 見逃される構造災
- 2 対症療法の増殖 — 「カンブリアの羊」騒動より
- 3 連鎖する秘密主義

構造災とは、つぎの 5 つの特性が状況に応じて複合的に関与する、科学技術と社会の境界で発生する複合境界災害である。

- (1) 先例が間違っているときに先例を踏襲して問題を温存してしまう。
- (2) 系の複雑性と相互依存性が問題を増幅する。
- (3) 小集団の非公式の規範が公式の規範を長期にわたって空洞化する。
- (4) 問題への対応においてその場かぎりの想定による対症療法が増殖する。
- (5) 責任の所在を不明瞭にする秘密主義が、セクターを問わず連鎖する。 45-46p

4 「どかん」型と「じわり」型

第 2 章 構造災のメカニズム

- 1 過去の踏襲が不合理を生む
- 2 問題の解決が公益に合致しない
- 3 自己運動する制度

第 3 章 構造災の系譜

1 くりかえす構造災

1937 年 12 月 27 日、前代未聞の大事件が日本海軍で発生する。最新鋭駆逐艦の主翼タービン翼が破損している事実が、定期検査で判明した。引き続き同型艦 5 隻においてもまったく同様の事故が続出していることが判明する。

1938 年 1 月 19 日、原因調査のため山本五十六海軍次官を長とし、臨時機関調査委員会(臨機調)が設立。事故原因はタービンの翼車振動とする最終答申を提出して 1938 年 11 月 2 日に解散する。

1943 年 4 月、真の原因は翼車振動ではなく、全力未満の速度領域で発生する 2 節振動という翼の複雑な共鳴振動であった。

この臨機調事件、海軍技術史上最大の事故は、秘密主義・対症療法の増殖・間違った先例の踏襲から構造災であったと思われる。

- 2 高度国防国家と高度成長国家
- 3 原子力法案のつくられ方

第 4 章 いま生まれつつある構造災

- 1 いま政策を支える社会観
- 2 ポイント・オブ・ノーリターン

3 構造災と無限責任

4 無限責任の有限化—社会的な責任配分へ

終章 構造災をのりこえる提言